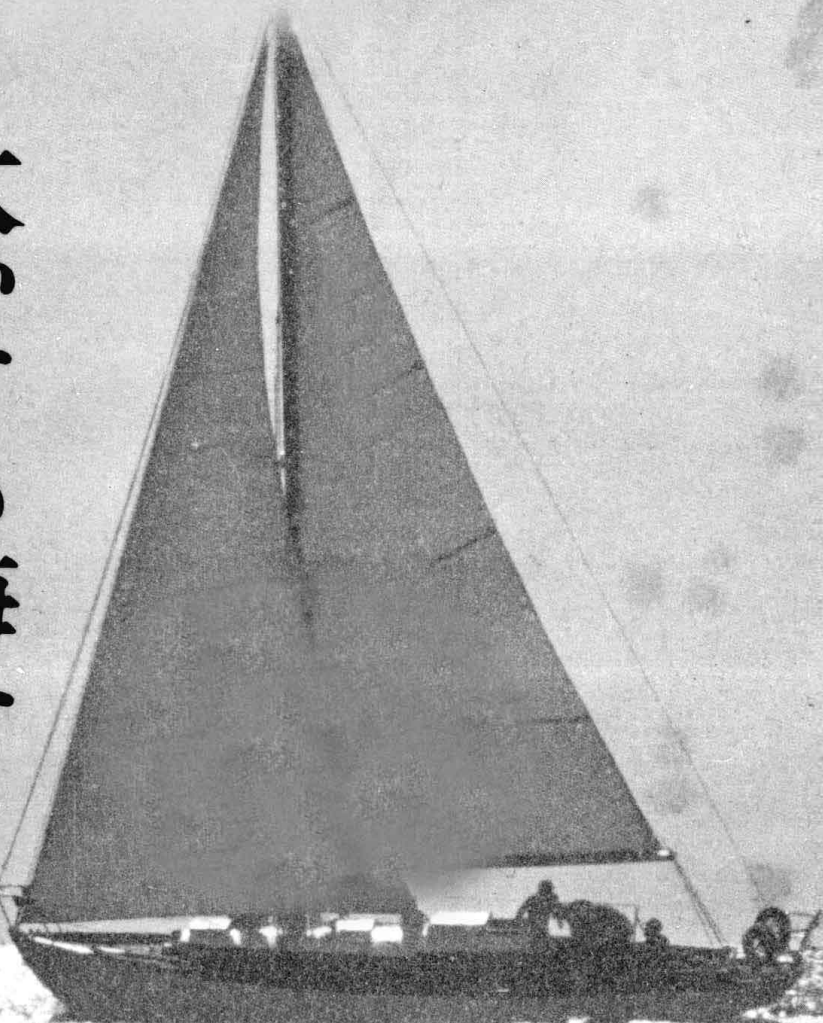


大いなる海へ

石原慎太郎

大いなる海へ

石原慎太郎



大いなる海へ

著者 石原慎太郎

発行者 陶山 巖

印刷者 草刈 親雄

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

振替 東京一五六五三

電話 東京(265)六一一

印刷所 中央精版印刷

定価 四二〇円

昭和四十年七月十日 印刷
昭和四十年七月十五日 発行

検印廃止

目次

海の弔辞 7

死のヨット・レース脱出記 13

風と太陽の航海 41

翔鶴号の遭難 75

彼女の名は 97

載みし荷は孤独

116

ヨット春秋

121

海の友情

139

大いなる海へ

145

裝幀 鈴木安男

大いなる海へ

海の弔辞

—— 悲運の友の死をいたむ ——

冬^{フユ}の海が僕は好きだ。ほとんどのヨット乗りがそうであるように。

その気まぐれを、この季節に最も残酷にあらわにして荒れる海。重い風、黒く険しい波、頬を刺す雨、そしてあの不思議なくらい生暖かいしぶきの飛沫。それらのすべてを僕は愛する。そしてまた、一日短かくしあわせだった太陽の終焉に凪いだ海一杯にひろがるあの冬の黄昏を。

悪しき時は世界に指折り数えて悪しく、美しき時は他にたぐいなく美しい僕らの海。

夏の喧騒が去り、秋のはなやかな嵐の過ぎた後に、黒と灰色と白だけにいろどられる海に真のいいを得るものこそ選ばれたるものではないか。

僕らの駆る船はか細く、その帆は小さい。そして僕らのいどむ海は余りに大きく余りにきびしい。しかしそれゆえに僕らは感じるのだ。今、まがいなく僕らはここに在ると、この海の上に在るのだと。

船体^{フナ}に碎ける波の震動、真横^{マビタ}の風に鳴るステイ、舵棒^{アイラ}のきしみ、それらの与えるすべての戦慄のうち僕らはその海を駆けていく自分を感じる。

船をもちあげては落とす黒いうねり、真白な牙をむいて間近にせまる暗礁、凍って落ちかかる星の影、かつての詩人はそれらが与える戦慄に礼をすらささげた。

その戦慄のうちに、僕らは地上のいつどこにあるよりも確かに、在る。果てしのない海、残酷な海、そしてなんと小さいがなんと見事にそこに在る僕ら。そして、僕らが在るからこそ、海もまたそこに在るのだ。その逆説を自らに説くのに僕らは何の言葉もいらない。ただ一枚の帆さえあれば。

北北東、風速八メートル、正午スタート三十秒前。

秒を読んでいくあの瞬間の重なりの中に、スタート・ラインを目ざす僕らすべての間に見えずして張られた一本の糸に震える共感を、知らぬ人たちに向かって僕はどんな言葉で語ったらいいのだろう。

僕らは出発した。——初島目ざして。

スタートは「早風」がトップに、次いで「アルマダ」そして僕らが。「早風」は風上に上り、僕は真っ直ぐに袋帆^{スベレ}を張って「アルマダ」を抜いた。半時間後、コースを重ねた「早風」を抜きトップにたった僕を「カザハヤ」と「早風」がつづいて追う。

スタート後二時間、風力増してスピン走行不可能。大前帆^{ゼノア}に変更。同様にゼノアを張った「カザハヤ」「早風」がつづく。午後三時半、初島をまわる。風雨とみに強し。初島南岸でゼノアにトラブル、「カザハヤ」に抜かれ「早風」間近につめる。

午後四時半、雨強く視界きわめて不良。進路七十七度。風北東にふれてますます強く、真向^{グロース}かいの

帆走きわめて難航。日没間近、ようやく「カザハヤ」に雁行ついに抜き返す。「早風」やや遅れ後方七、八百メートルにつづく。縮帆すれど傾斜はなはだしくトップグループ三艇のうちで最も難航の様子。目を凝らす^くが、やがて日没、たちまちとざすやみに、最後に遠く黒い船体がかすんで消え去る。

午後六時、突風^{ツブ}をまじえて風ますます強く傾斜、ピッチングはなはだしくクルーに船酔い続出、八人中五人倒れ艇長以下三人で走行す。視界きわめて悪く、豪雨中はほとんど零。横流^{ドリフト}を感じ進路五十度に変更して上る。途上、不自然に点灯する漂流物を見る。帰港後報告したが後に漂流、行方不明中のタッグボートと判明。日没後「カザハヤ」「早風」の航海灯見えず。

午後七時、予想方角よりはるか北方に城ヶ島の灯台発見。その以前より海めちやめちやに荒れ、不連続線通過の間のデッドカームの後、風ブローとなつて北東、北北東、北西、交互に吹く。瞬間風速二十数メートル。

午後七時半、城ヶ島を過ぎ剣崎にいたるも、ゴール・ラインの久里浜、水中埋没の長防波堤、海嶺^{あじか}島近辺の暗礁強潮流、ならびに荒天中の視界不良による危険を感じゴール・ライン前約二マイル（約三・二キロ）の地点にて棄権し油壺に帰港退避す。

「早風」そして「ミヤ」。君らをのんだ海は一体何だったのだろう。マストを折つて船体^{ふた}をさいた気ちがいの波か、やみの底から突然キバをむいて襲った暗礁か。それを知るものは君たちしかない。

いや、僕らは知っている。十分に知っていたはずだ。僕らがいどむものが何であるか。僕らを船の

上に戦慄させながらしあわせに在らしめるものが何であるかを。

知りながら、なぜに君らは逝ってしまった。舵を奪い帆をさいて君らを水底にひいていったものは何だったのだろうか。

人々は言う。光栄ある棄権をこぼんだ青春の過信、若さの不備と。あるいはそれらはすべて正しかろう。しかし、君らに向かうそれらさまざまな憶測、そしりに対して僕は今ようやく耳をふさごう。そして今はおだやかに日の光にさえ輝く海に向かって目を凝らすのだ。

すべてがよみがえって来る。灰色の海一面に開かれた袋帆スベの花たち。回転する灯台の灯に照らされた大前帆セノフのスクリーンに浮かび上がった異形な波たちのシルエット。そして闇に近い黄昏の中に帆を水に接して傾きながら走りつづけた君らの最後の姿が。それは星も灯台も明りひとつなかったあの濃い灰色の背景の中に今、不思議な光彩をとまなびがえって来るのだ。

だれが何を言おうと君らは、僕らは、まがいなく雄々しくあの海に在った。そのよろこび、その光栄がヨット乗りそれぞれひとりひとりの胸におのれの手によってしか刻まれず、そのために君らが死をもって償ったとしても、それは他の何によって否まれるものではない。

君らの死が、残った僕らに何をもたすかをやがて君らを見るだろう。僕らはただ逝ってしまった友たちの数を数えるだけは決してしまい。君らを喪うとも君らと一緒に僕らはあの海を喪うことは決してあるまい。

死のヨット・レース脱出記

